

## ぼくにとつての茶道

神戸情報大学院大学二年（兵庫県）

## 小野 芳敬

大学院での研究生生活も少し落ち着いてきて、学校に茶道部がなかったこともあり、「初心者のための茶道教室」に通うことにした。そこには、いろいろなバックグラウンドを持った人たちが通い、毎週水曜日の夕方から始まる二時間が僕にとってまさに「世俗を絶した別世界」に変わった。先生の名前が茶名って一体どういうことなんだ？先生の綺麗な着物が毎回違うのは一体どういうことなんだ？僕の頭の中は一気に混乱に陥った。今、このエッセイを書いている最中さえ混乱している。そして、それに追い打ちをかけるように飛び交う「和敬清寂」「一座建立」「茶禅一味」といった四字熟語のオンパレード。初心者だから仕方がないにしろ、先生の前ではもちろん、他の客の前でも恥をかいていく毎回のレッスン。もう完全に僕の頭の中はパニック状態である。

でも、この半年間で何となく分かったことが一つだけあ

る。それは、茶道は「相手を思いやる心」を養ってくれるということだ。先生は僕たちが想像すらできないくらいに、僕たちのことを考えてくれていることが毎回の稽古で伝わってきた。主としてのおもてなしを果てしなく追及する先生の姿勢に、とても胸が熱くなった。それに比べて、僕は何かを果てしなく追及できているだろうか？ただなんとなく毎日を惰性に過ごしていかないだろうか？故松下幸之助のように猛烈に働いて、忙しいはずなのに、「忙しくてお点前のお稽古ができませんでした」って本当だろうか？といったように、茶道はこれまでの自分と向き合い、そしてこれからの自分と向き合っていくための良い機会となっている。

僕は今、修士論文を執筆している。論文を書くときは、常に「巨人の肩の上に立つ」という心構えでいる。そして、このことが論文を書く上でのお作法だと教わった。何だか茶道と同じような気がする。茶道の中でたくさん要求される細かいお作法には、先匠がそれなりの理由で築き上げてきたものがあるからなのだろう。僕は茶道の先匠が築き上げてきたお作法の理由を自分なりに探求したり、解釈してみたので、これからも茶道を続けていこうと思う。そういえば、先生の茶名はすでに知っているけど、本名はまだ知らない。ひよっとして茶室で先生の本名を聞くことは、利休居士が定義したお作法ではないのかもしれない。分か

らない。そして、最後に何よりも茶道を一緒に志す仲間が欲しい。茶道という答えがないだろう道を一緒に歩み、先匠が伝えたかった茶道の魅力を探す旅に出かけてみたい。

僕は今こんなことを妄想している。コロナ禍をきっかけに、社会のデジタル化が人々の想像をはるかに超えたスピードで、一気に進んでしまったように思う。リモートワークがニューノーマルになり、出社することが出張扱いになる会社も出てきた。そして今話題になっているメタバースといった仮想空間。僕はこの仮想空間で茶道を一緒に志す仲間をつくってみたい。現実社会で茶道を志す仲間を集うには、まだコロナ禍の影響もあったり、フィジカル・ディスタンスを世の中が推奨している傾向があるので、少し難しいような気がする。そして何より日本では人口減少がこれからもずっと続いていく。そんな社会情勢の中で茶道という文化をこれからも発展、進化させていくためには、仮想空間で「俺、茶人だぜ？」と言わんばかりのAvatarが世界中で増えていくと、現実社会でも茶人がどんどん増えていき、新しい茶道の文化が形成されていくような気がする。